

## ■BF連盟戦記5 連華&レイチェル編

光ある所に闇があり、そして陰もある——  
武術の世界において覇を唱える“闇”。  
しかしそれとは異なる裏世界はもう一つあった！  
“陰”  
——すなわち“淫”！

「……その“淫”があんたたちってわけ？」

【はいそうです】

深紅でマイクロミニ仕様のチャイナドレス姿の美少女・馬 連華が問い、  
BF連盟の男性事務員が答える。  
BF連盟——それは性の技を繰り広げ合う競技“バトルファック”の  
普及を目指す組織である！  
嘘か真は分からないが、連盟は自分たちを“闇”と並ぶ“陰”＝“淫”と称して  
一部の武術家——女性限定——を挑発した結果、  
連盟を倒すために連華がやって来ていた。

「ふざけた組織の噂は聞いてたけど、本当だったのね……

で、何であんたもいるわけ？」

「だって面白そうじゃない？ この戦いは裏で派手に宣伝されるみたいだし  
……ルチャドールとしては放っとけないもの♪」

偶然 連華と同席したのはカストル——本名レイチェル・スタンレイ。  
こちらは典型的な西洋系の美女で、ルチャリブレ用の衣装で  
胸元も腹も脚も晒し、連華に負けない豊満な身体を魅せ付けている。  
武において“魅せる”ことを重視したルチャドールである彼女は、  
“淫”の存在に強くエンターテイナー精神を刺激されており、  
連華だけ目立つのを防ぐため、自分が誰よりも目立つため、“闇”を代表して参戦していた。

『二名の美女の参戦にBF会場も盛り上がっている！  
では早速試合を始めるぞ——！』

## ◆今回のバトルファックルール

### 対戦形式……

『エンドレス』制限時間なし、精力が尽きる or 失神でKOされる、もしくは降参で決着がつくまでの真剣勝負。

『タッグマッチ』連盟側の男性選手二名と挑戦者側の女性選手二名で、一つのリングで試合する。

### 基本ルール……

B F連盟のリング上での対戦。

絶頂や精力が残っているかは審判の判断で判定される。ただし選手の状態によっては続行可能の確認や意思表示が必要。

意思表示には言葉での自己申告の他、自ら行為し続ける、勃起を見せる、ファイティングポーズやピースサインを見せる、などでOK。

リング・会場は連盟が結界を施しており、近寄ると攻撃系の能力が制限・封印される。

### 敗北条件……

精力が尽きる、ダウンから10カウント、失神、降参、ルール違反など。

他、審判が続行不能と判断した場合。

ただし試合を盛り上げるため、挿入や膣内射精、KOが間近、などのタイミングでの降参は無効と判定されることがある。

また、ダウンしても追撃が行われた場合は基本的に10カウントしない。

一度絶頂しても精力があれば続行可能。

### 禁止行為……

凶器・ドーピングの使用。ただし性感攻撃が目的の衣類や淫具の使用に関しては有効とする。

性交、快感を与える目的やそれに類するもの以外の攻撃的行動。

避妊具等の使用については自由。

なお、妊娠をはじめとする、試合中に発生したいかなる事態・被害について、連盟は一切の責任を追わない。

『強いとはいえ武術界では“弟子級”のご両名！

こちらも弟子級相当の選手を用意したぞ！』

連盟側の選手は二名の少年。

B Fにおける弟子級、つまりアマチュアの選手だが、見せつけるように全裸で姿を現した。

肉体はともかく精力に関しては一目見ても尋常ではないのが連華たちにも感じ取れる。

「っ……！」

「あらあら……なかなか立派なモノ持ってるじゃない……！」

【うわ、超美人！ もう武術家じゃなくてグラドルでしょ】

【……公式BFの経験無いってことは、素人ってことだけど……

いいんだよね？ ヤッチャっても】

連華たちが生粋のバトルファッカーではないため、遠慮か軽視か、淫闘をためらう少年たち。連華たちに勝つことが前提の発言だが、言うだけのことはあり、早くも連華とカストルは彼らの力強い精力に疼きが隠せない。が、同時に生意気な態度に闘争本能も疼く。強い武術家に対するのと同じように、期待と歓喜に薄っすらと笑みを浮かべて逆に挑発までしてみせる。



「言ってくれるじゃない。

ふふ……面白くなってきたわ♪」

「ええ♪ 良いショーになりそうね♪」

『両陣営が同意！ 条件も問題なし！ では珍しいアマチュア・タッグバトル……開始っ！』

.....  
.....

【くそっ、やめろ……んはあっ！】

ぐりっ♥ ぐちゅ♥ ぎちいいっ♥ ピュルルルッ♥

「あ～～もうしっかりしなさいよ！ この程度の足コキに何もできないのお～？」

【挿れられさえすれば、こんな素人に……んっあああっ！】

たふんっ♥ ぎゅむ♥ ぶるうんっ♥ ピュピュウウッ♥

「ダメよ♥ 今挿れたってちっとも盛り上がらないでしょ♥

ここであなたが耐えきって……ああんっ早過ぎい♥」

『開始から三分経過しようかというところで二つのペニスが射精——！

とても素人とは思えない動きに連盟側、圧倒されている——！』

アマチュアと言えど経験豊富な少年たちと、公式BF試合未経験の美女たち。だが試合が始まり、最初に悲鳴を上げたのは少年たちの方だった。連華たちが素人というもあり、少年たちは油断していた。そこを開始直後から一気に責められた、というのもあるが、何より思いのほかに挑戦者側の淫技が強く、アマチュア選手と比較しても充分すぎるテクニックに、絶頂を許してしまう。

「中国武術の歴史を舐めないで♥ こんな戦いくらい想定済みよっ♥」

巧みな脚技で少年を翻弄する連華。

チャイナドレスは胸元にカットがあり、

丈もマイクロミニで太股がほぼ付け根まで見える露出度。

顔ほどもある大きな胸と、鍛えられていながら脂の乗った

女性特有の柔らかさを持つ太股が少年の意識を惹き付けた。

その隙に転がし、足裏でペニスを踏み、抜く。

圧倒的不利な体位となっては少年のテクニックも精力も意味をなさず、

連華の強気な釣り目に見下されながら足コキ射精に至る。

「ふふっ、リングで視線を浴びるためならこれくらい余裕よ♥

ほおら、オーディエンスがご所望よ♥ もう一発イッちやいなさあい♥」

派手なパイズリで雄を搾り取るのはカストル。

ルチャリブレ衣装は連華以上に露出度が高く、

下はマイクロミニのスカート風で立っても座っても脚が全て見えるほど。半分ほど出ている尻肉を観客に見せながら、ブラジャーのようなトップスの中に少年の勃起をしまい込み、連華に負けないサイズ——体質上、張りとボリューム感では勝る爆乳で抜き立てる。ダイナミックな乳抜きは少年を視覚的にも魅了するが、ただ派手なだけでなく男好みのする緩急のついた刺激で見た目以上の威力を発揮。身体能力でもカストルが圧倒しているため強引に抜け出すこともできず、乳内射精に陥ってしまう。マスクを着けているが、カストルの容姿が端麗であるのは間違いない。金髪美女の顔に白濁がかかり、それがわざと見えるようにしてカストルは観客からの視線と声援を一身に浴び、目立つことで更に歓喜の笑みを浮かべる。

【て、手加減してなければ、今頃中出しでアへらせてたのに……あっやめ！  
イ……くうっ！】

ずりゆりゆりゆっ♥ ピュピュウウツ♥

「男らしくないわねえ……それに、本気で戦ってたとしても、あんたなんか挿れさせるまでもないわっ♥ ほらっイっちゃえ♥ イっちゃえっ♥」

『完全に初動を誤ったか?! 倒れたまま起き上がれず完封された! 連華の圧勝———!』

彼らは挿入時の攻撃力が自慢のようで、確かに精力は並ではない。が、連華からすれば動きには隙が多すぎる。仮に本気で戦ったとしても、結果は同じだっただろう。負け惜しみを言う少年に、連華が嗜虐的な笑みを浮かべてトドメを刺す。

一方、カストルは圧倒的優位だったにも関わらず悲鳴を上げた。

「ああっ♥ そんな……私のパイズリから抜け出すなんてえ♥」

余裕を見せて乳圧を緩めた時、相手の少年が脱出して反撃に転じた。後ろを取られたカストルは胸を鷲掴みにされ、あわや後背位で挿入されるかという状況で不自然に大袈裟、どこか楽しげでもある悲鳴を出す。

【油断したね! 所詮は素人、こいつで一気に墮としてやる……っ! ?】

ぱんっぱんっぱんっぱんっ♥

「ああんっ♥ ダメえ♥ そんな極太おちんぼ挿れられたら♥ いやあああんっ♥」

『後背位で挿入! カストルが快感に悲鳴を上げる……いや、これは素股責め?!』

妖艶美女のピンチに観客が沸く。……が、このピンチはカストルが意図的に演じたものだ。わざと力を緩めて相手にチャンスを与え、ピンチを演出して圧倒するのは別の注目を浴びる。そしてピンチからの逆転——典型的な興行プロレスの展開を愉しみ、結果的に挿入させることなく素股で責め切って、相手以上に大きく喘いで誰よりも派手に目立った。

【素股に躲したつもりだろうけど、それならクリをこすり上げてやるよ！  
ほらほら、極太挿れて欲しくなったんじゃない？】

ずりゅ♥ ずりゅんっ♥

「ああっ♥ おちんぼ♥ こすりつけないでええっ♥

……はあ、ひねりのない体位と責めね……期待した私がバカだったわ。  
せいぜい派手に出しなさい」

【何っ……っあ！ 素股なんかに、搾られ……は、離せ、あぐ………っ！！】

ぎちいつ♥ ビュルルッ♥ ぶるうんっ♥ びくうんっ♥

「あっはあああん♥ イッチャうううううっ♥♥」

『激しいバックのような素股責め！ 盛り上げ方がわかっているカストル、相手以上にBF選手らしく勝利——！』

身体能力が高いとはいえ、BF素人に負けた少年たち。  
だが連華たちはBF公式試合にこそ出ていないものの、完全な素人ではなかった。  
片や、拳法の達人でありながらエロの伝道師として高名な馬剣星の娘。  
片や、ルチャリブレの合間に非公式淫闘で性技も磨いた闇の者。  
両名はBFの公式試合に出ていないとはいえ、  
経験量と素質は並のアマチュアでは届かない域だったのだ。

『武術界は達人の方ばかり注目していたが、弟子級にも……

いや、世の中には、まだまだ強いバトルファッカーが存在する！

それを証明する名勝負でした——！！』

「あいつら、今更そこに気付いたの？ 情報がえらく偏ってるわね……」

「実力が分からないから少しは盛り上がったんでしょ♪ ……それより何よ、快感センサーって。あれじゃイッてないってバレちゃうじゃない……！」

選手が達したかどうかを判定する装置・快感センサー。

その存在を知らされていなかったため、カストルはイッた演技に関しては

独り芝居をさせられたようで腑に落ちなかった。  
武術界の者でもないのにアマチュアで相手されたことも気に入らず……  
近くの連盟事務員からマイクを奪い、更なる試合を要求する。

「ちょっとマイク貸しなさい！」

『こら、何すん……あっ！』

「私たちはまだまだ戦えるわよ？ ていうか、あんな格下と戦わされて物足りないくらいよ！  
オーディエンスだってせっかく闘技場まで来たのに、  
たった一戦だけなんてもったいないでしょ？  
それとも、武術界の弟子級にこれ以上好き勝手されると困るのかしら？」

【おっ、いいぞ姉ちゃん！】

【確かに勝ち逃げされても、こちらとしては……】

ぷるっ♥ ぎゅむんっ♥

「演技じゃない、本当のピンチ……観たくないのお？」

【そうだ、もっとみせろ！ いろんな意味で！】

【アマチュアじゃなくて達人出せ達人！】

どうも連盟は武術界の女性達人が来ることを期待していたようで、  
それを見越して調整したプロ選手ばかり準備していたようだ。  
武術界での話とはいえ、連華とカストルが弟子級とあつては  
プライドや立場の都合、プロは出場しにくい。  
その場凌ぎに出したアマチュアもあっさり敗れ、連盟としては早く切り上げたいのだろう。  
そこをカストルは見抜き、観客と連盟、双方のプライドや興味を刺激する言葉で挑発。  
連盟側はともかく観客を味方に付けたカストルは、  
この場の何よりも強い、民意という権力をコーナーポストの上で発動する。

『えー、……仕方ありませんな……はい………ハイ！ここまで言われたら連盟も  
黙ってはいられない！ では弟子級の両名に、連盟の“達人級”を味わってもらおうぞーっ！』

「ちょっと、何勝手なことしてるのよ！」

「だーって、マエストロには“陰”のメンツを潰してこいつって言われてるし……  
それに、アマチュアがああ程度なら、プロ級でちょうどいい相手でしょ♪」

カストルの目的は連盟に武術家の性技を見せつけること。  
アマチュアを倒しただけでは帰れない。  
実力的にもプロが相手なら丁度いい……つまり観客も満足する  
最高のショーにできると考えたのだ。

これでルチャドールとして満足いく戦いができる。  
ツッコむ連華をよそに、カストルは舌舐めずりを見せた……

……

……

『では改めて連盟選手の入場！ 今度はプロ、  
実力も戦績も達人と称して間違いない二名がリングに上がる！』  
【圧勝とはいえ一戦ヤった後の相手か……気が引けるなあ】  
【まあ客がお望みならやるしかねえだろ】

現れたのは筋骨隆々の青年。プロレス風ショーツの上からも分かる  
股間の隆起と精力は、まさに達人と呼ぶに相応しいもの。  
完全に第一戦の少年たちの上位互換であり、  
武術での気当たりにも似た迫力に連華とカストルも生唾を飲む。



「これは……♥ 連華ちゃん本気モードの  
出番みたいね……♥」

「ふふ♥

こうでなきゃ面白くないわ……♥」

『武術界の弟子級は淫闘界での達人となれるのか、それともやはり弟子級なのか?!  
第二戦、開始っ!!』

連華に向かってくるのは比較的のんびりとした男。

物腰は柔らかいが、実力は間違いなく本物、一切気を許せない相手だ。

近寄らせないよう間合いを図りつつ、拳法のものに近い構えで片脚を上げ、

さり気なく胸を寄せてパンチラを見せる。

男であればどうしても意識してしまう美女の谷間とパンチラ。

胸と股間、上下に視線を惑わした瞬間に、連華は金的蹴りと変わらない所作で足コキを狙う。

「はっ！」

(やっぱり男ね……かかった！)

ばちいんっ♥

「んぐっ?! つつくううっ♥♥」

しかし、次の瞬間に悲鳴を上げたのは連華の方だった。

男は連華の蹴りを躲すと同時に蹴りを放ち、金的ならぬマン的を打っていた。

リング上で初めて打たれる急所への痛み、足の甲の妙な熱さ……

それらが生む快感に、強気な表情が一気に歪む。

『おっと連華、一戦目のように金的足コキを狙うが逆にマン的を喰らってしまった!』

「くふっ♥ んんんん……っ♥」

(は、速い……♥ 私が、反応できないなんて……♥)

マン的の威力は淫闘にしては強めで、かなりの痛みも伴うが……

男の体温と絶妙な加減によるものか、痛み以上に快感が大きい。

硬直したところに男が二撃目を打つ。

これを上げていた脚も両手も下げて凌ごうとするが、

二撃目は実は虚の動きであり、股間を蹴られるのではなく胸が指で触れられる。

「ああっ♥♥ こ、この♥♥」

くにくにくにつ♥ くりくりくりくりいっ♥

「あふあっ♥♥ ああああっ♥♥」

(速過ぎる♥ 一瞬で……勃起させられた……♥)

柔らかなふくらみが むにゅん♥ と揺れたかと思うと、その時にはもう乳首を掴まれている。

連華が反応して振り払うまでに七回以上は両乳首を刺激されており、男の異常なまでの技の速さに恐怖と歓喜で乳首がチャイナドレス越しに形を浮かばせる。

「い、一瞬で何度も乳首を捏ね回すなんて……♥♥ これが達人の淫技……♥♥」

【気に入ってくれたかな？ でも連華ちゃん、なんかマゾっぼいし、もうちょっと強めにいくねー】

「……“はやい”男の癖に、言ってくれるじゃない……？  
連華ちゃんを怒らせると怖いわよ……！」

確かに多少感じさせられたが、それだけでマゾ扱いされるとは心外としか言いようがない。連華は男のスピードを抑えようと、大きく一呼吸。男の技に対抗するため、体内の気を練り、身体能力を上げる。

『凄まじい早業！ あっという間に連華の乳首が勃起させられた！  
だが連華もまだまだ強気、勝負は始まったばかりだ！』



大きなリングの反対側、カストルの相手はどこか軽薄で強気な男。自信たっぷりに構えているが、妙に隙だらけであり、技を受けてやるとばかりに挑発してくる。

【魅せプが好きなんだろう？ まずはイッパツ、ハデな技魅せてくれよ！  
「あら、わかってるじゃない♪ なら遠慮なく……いくわよーっ！」

観客にアピールすると、カストルは全身をバネにして驚異的に加速。跳び上がると男の頭を太股で挟み、股間も押し付けて下半身でロックする。

『相手の頭部を脚で挟み、フランケンシュタイナー、いや“幸せ投げ”だ！  
これは決まる——！』

俗に幸せ投げとも呼ばれるこの投げ技は美女が男にかけてこそ真価を発揮する。後方に回転して男をマットに叩き付け、いかにも淫闘映えする技を決めると、カストルは続けて顔面騎乗マウントで責め続けるつもりだったが……

【っ！】  
がっっ♥ ぎゅるっ……！

「魅せてあげるわ♥ BFにおいてもルチャドールは……」

ごづらんっ♥♥

「最きよおほおっ♥♥」

男を叩き付けたはずなのに、快樂の音を奏でたのはカストルであった。  
カストルは叩き付ける際、淫闘として成立するように威力を抑えていた。  
それが仇となり、叩き付けられた衝撃に合わせて舌で陰唇を突かれたのだ。

『しかしダメージを受けたのはカストル！ 圧倒的有利な状況で反撃を喰らっている——！』

大技を決めた、と思わせての被弾。

初めてカストルがまともに性感ダメージを受けたことで会場は盛り上がるが、  
注目を浴びても意図せぬ劣勢ではカストルが楽しみ切れない。  
すぐに離れようとするが、予想外すぎる反撃に面食らって腰が震え、  
追撃まで喰らってしまう。

『体位は顔面騎乗だが、カストルはここから責められるのか？』

(叩き付けに合わせたとはいえ♥♥ 衣装越しなのに、なんて舌技♥♥

マズいわ、いったん離れないと……♥♥)

「これぐらい何ともないわよオーディエンス♥♥ すぐ勝ったんじゃ盛り上がらないもの♥

こうじゃなきゃね♥ いくわよ、ここから……」

ぬぢゅ♥ ぢゅるんっ♥ ぎゅむううっ♥

「んおおおっ♥♥ ぬ♥ 抜けない……なぜええっ♥♥」

『反撃宣言、しかし責めも離れもできない！

男の舌に吸い寄せられるように自分から腰を押し付けている——！』

組み付いているのはカストルの方なのに、騎乗後もダメージを受け続ける。  
男が強靭で太い舌肉で陰唇と陰核を布越しに刺激し、同時に吸い付く。  
その責めにカストルの腰が競り負け、快感で腰が勝手に男に向かうのだ。

「こ、これが達人のか……♥♥ なんてフィジカルなの♥♥ だからと言って♥♥

簡単には終わらないわよおっ♥」

達人と言うだけあり、舌一つで一気に発情させられた。

とはいえまだまだ絶頂には程遠く、試合も楽しみ切っていない。

快感を得て一段と色気を増した美貌で、観客に笑顔を見せて次の責めに転じる……

◆  
『連華は金的を狙い続ける！ 高速蹴りの連射！ しかし全て躲される——！』

「このっ♥ 何で当たらないのよっ♥」

【じゃ、マゾ女にはちょっと強めに……】

ごぶんっ♥♥

「きゃひいっ♥♥」

『今度はヒザでカウンターを喰らった——！ 重い一撃に目が裏返る！』